

237. 滋賀県甲賀郡水口町 泉古窯採集遺物の検討(前編)

—古墳時代須恵器の地域色の発現について—

1. はじめに

ここで検討する滋賀県甲賀郡水口町泉古窯は和泉陶邑古窯址群の編年で謂うところのTK47型式前後に対応し、現在知られている滋賀県(旧国で謂うところの近江)の須恵器生産地中で年代的にもっとも遡り得る一群にある。¹⁾この時期の須恵器生産については、全国レベルでの生産地の拡散が行われているという点において議論がなされているところであり、小稿の目的の一つとしてはその様相の把握の為の基礎資料の提示にある。また、検討の内容としては泉古窯採集資料(中でも短脚高杯)を中心に据え、和泉陶邑古窯址群との関係(教習の関係)の確認と、泉古窯の流通圏についてふれるべく滋賀県下の資料の若干の集成からアプローチを試みたい。

消費地の動向などから滋賀県下での須恵器生産の開始は初期須恵器の段階まで遡るとは考えられるものの、小稿で目的とする視点とは異なるためにその問題についてはふれないこととする。

(註1) 滋賀県下でTK47型式併行期と考えられる生産地に伝野洲町夕ヶ丘21号墳出土での生産をその段階まで遡らせて考える立場に立つ研究は幾つか見られるが、現時点では窯跡自体は発見されていない。また、垂仁紀に見られるように近江国の「鏡谷の陶人」が「天日矛」の従人であるという記述から、初期須恵器の段階で生産が行われた可能性があるとの指摘はなされている。

2. 泉古窯とその周辺環境

泉古窯を中心に据えて、古墳などを含めた甲賀郡の周辺環境と滋賀県下での須恵器生産の中での泉古窯の概観的な位置づけについてふれてみたい。

(1) 泉古窯の周辺環境

泉古窯は周辺に前方後円墳の塚之越古墳、西籬子塚、東籬子塚等からなる泉古墳群を控え、地域の有力な氏族の存在をうかがわせる。具体的には甲賀(鹿深)氏との関連を指摘されているところである。ただ、周辺地域における発掘調査が進展していないことから集落

遺跡などの詳細は不明である。この地域の須恵器窯は直接前後する時期には確認されておらず散発的な操業が行われていたと考えられている。

(2) 滋賀県下の須恵器生産の中での概観的な位置づけ
滋賀県下における6世紀代の須恵器生産地は、何れも有力氏族の拠点と考えられるところに隣接して存在していることが指摘できる。例えば、鏡山古窯址群は野洲郡の有力氏族の墓域と考えられる大岩山古墳群に、堅田古窯址群は春日山古墳群にという様に有力氏族の存在と不可分の関係を持っていたと考えてよいだろう。

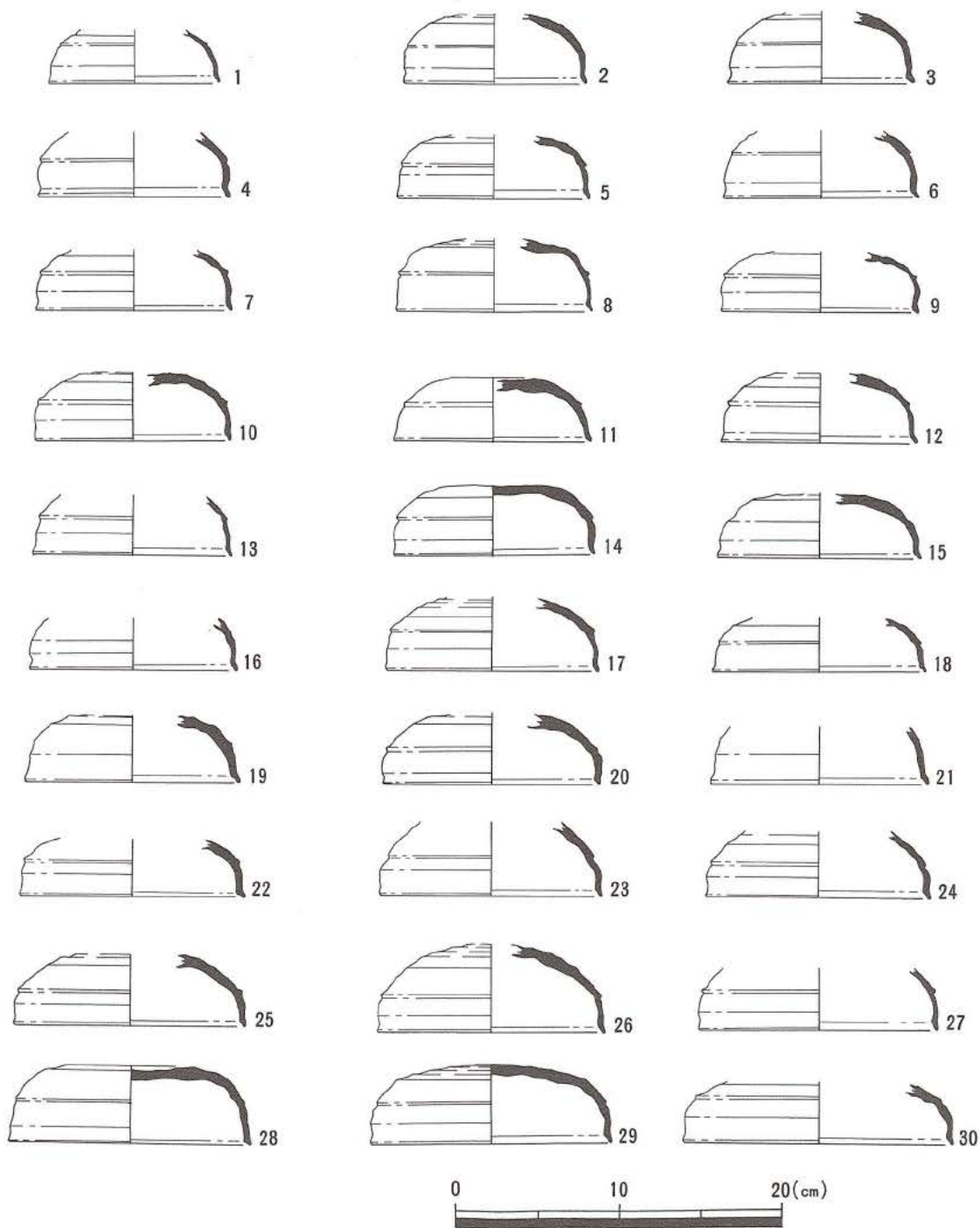
須恵器生産導入期における埴輪生産の問題についてふれてみよう。鏡山古窯址群は現時点では須恵器窯に伴う遺物としてはMT15型式のものが知られているが、一部では伝夕ヶ丘21号墳の遺物を以ってTK47型式まで遡るのではないかという指摘も為されており、開始時期については保留しておくものの、開始期に埴輪生産があった可能性を指摘されるものである。その他泉古窯を含めて、埴輪生産を行った痕跡のある須恵器窯は現状では確認されていない。近江地域で埴輪がそれほど顕在化していない現状を考え併せると理解できない現象ではないが、今後とも須恵器生産と埴輪生産の関係について追求すべきである。

須恵器生産の操業の様相についてふれてみよう。鏡山古窯址群は分布調査の結果から6世紀代に操業を開始し、約1世紀の間に同時期に複数の窯体による操業を行っていたと考えられている。この様相から一地域(ここでは野洲或いは蒲生郡地域)にのみ供給していたのではなく、広い地域を対象に生産が行われていたと想定されている。一方、ここで紹介する泉古窯址群や、堅田古窯址群、宮川古窯址群に関しては時間軸上の安定性が低いことが指摘できる。6世紀代に操業を行っている須恵器生産地ではあるが、鏡山古窯址群と比較するとほぼ単一型式で操業を終えている点が大きな差として理解できるのである。ここでふれる大きな問題として時間軸上の安定性と空間上の広がり的问题についても生産地、消費地のレベルから検討を加えなければならない。

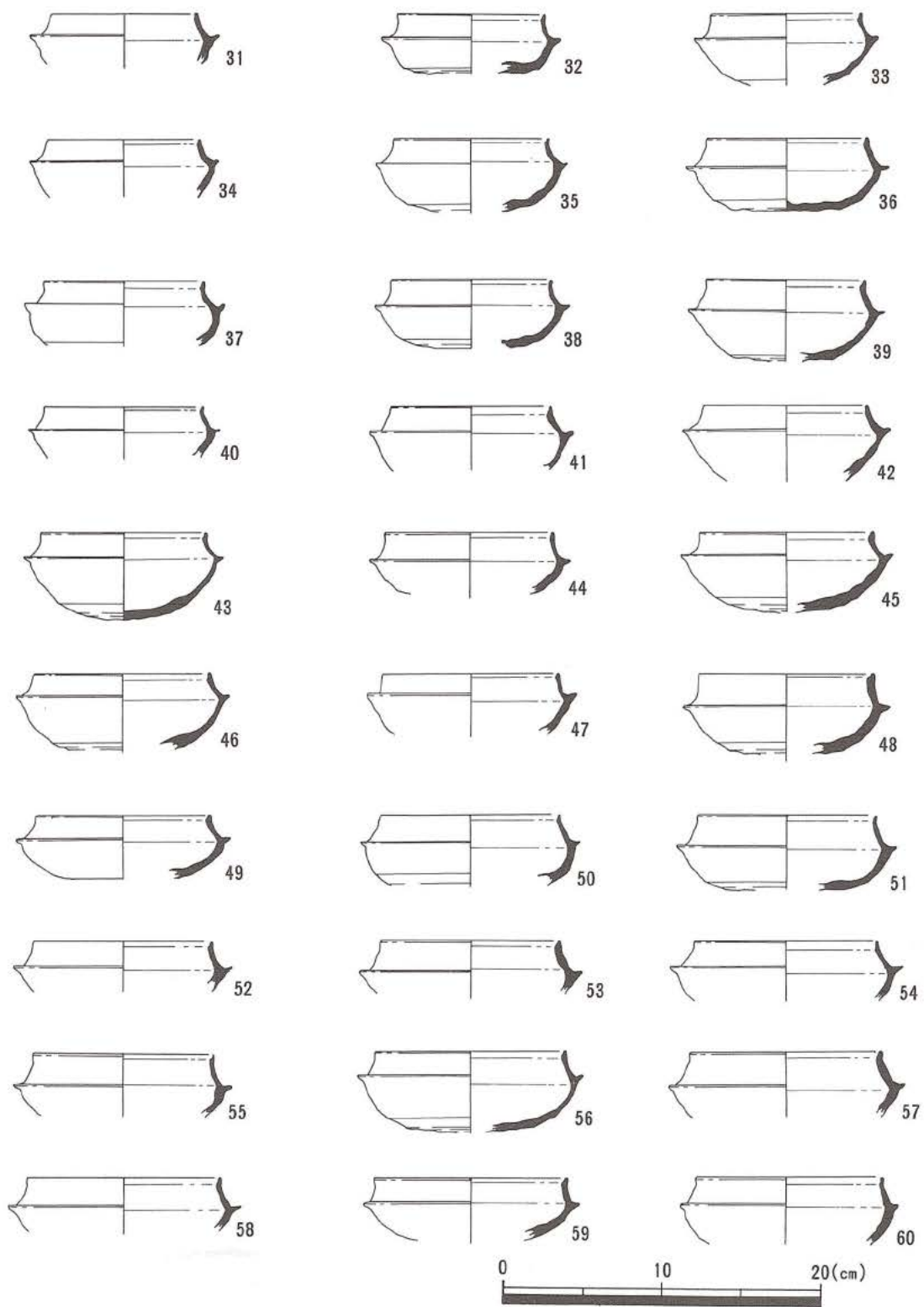
最後に大きな問題として取り上げるべき点として、泉古窯の製品の制作にあつての教習地の問題がある。6世紀代において日本列島地域で数多くの須恵器生産地が出現するが、それらの生産地間がどのような有機的

関係を持っていたのかについてふれなければならない。
 小稿ではその形態的特徴の抽出から、泉古窯の教習地
 の抽出と地域色の発現形態についてもふれていきたい。

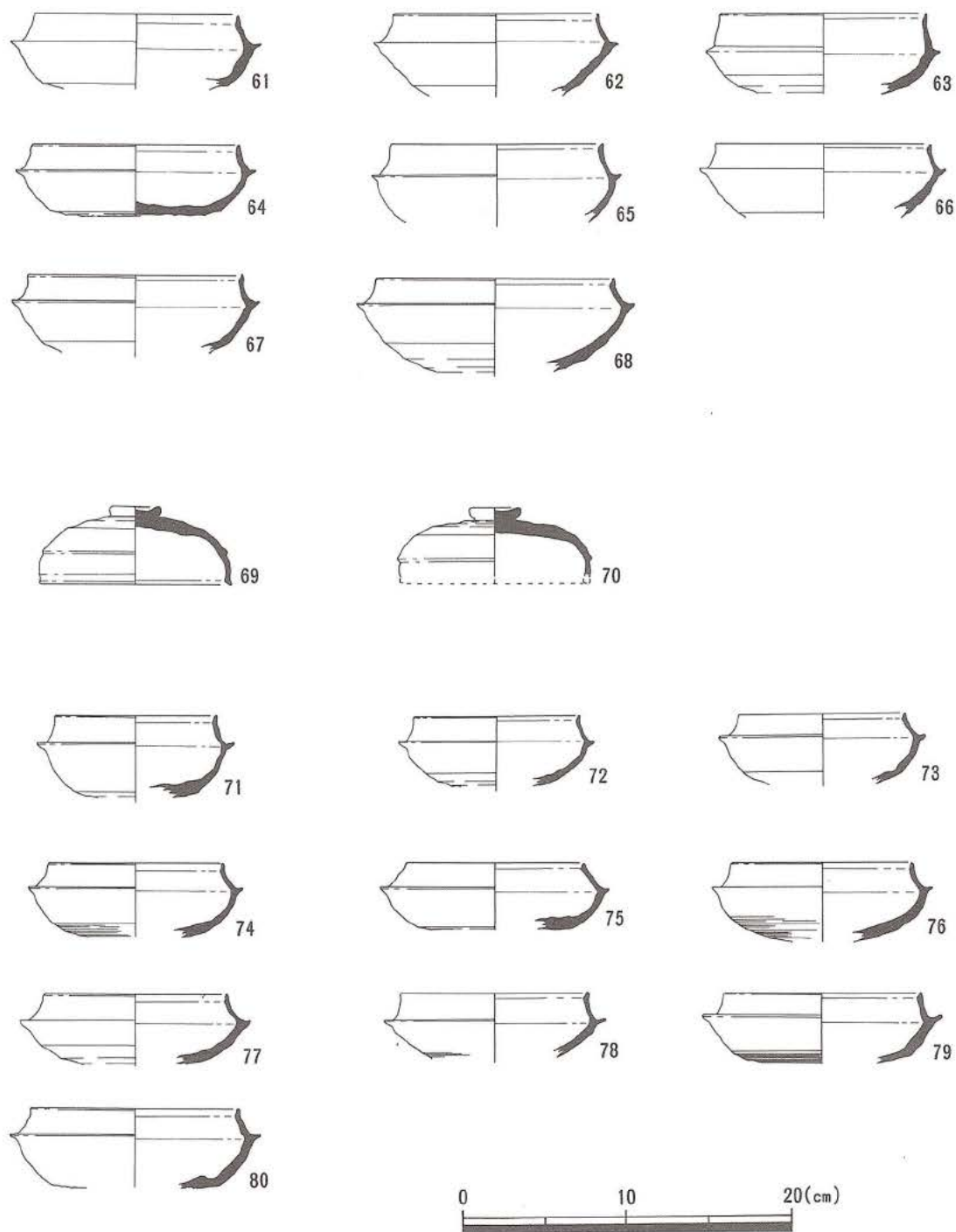
(畑中 英二)



第1図 出土遺物



第2図 出土遺物



第3図 出土遺物